

Ch.13 From social cognition to affect.

社会的認知から感情へ

Fiske, S. T., and Taylor, S. E.(2007). From social cognition to affect. In Fiske, S. T., and Taylor, S. E.(Eds). Social cognition: From brains to culture. Pp. 310-340.

Rep. 小森めぐみ¹.

Contents

(PREFACE)	310
DIFFERENTIATING AMONG AFFECTS, PREFERENCES, EVALUATIONS, MOODS, AND EMOTION	311
Affect and company	311
Differentiating positive and negative responses	312
Basic emotions?	314
Conclusion	316
EARLY THEORIES	316
PHYSIOLOGICAL THEORIES OF EMOTION	317
Facial feedback theory	317
Excitation transfer	319
Affective Neuroscience	320
Conclusion	322
SOCIAL COGNITIVE FOUNDATIONS OF AFFECT	322
Emotion as cognition plus arousal: interruption theories	324
Cognitive structures and affect: Matching theory	326
Obtained outcomes and affect	329
Emotion as managers of goals	332
Conclusion	333
Appraisal theories	334
Affective forecasting	338
Conclusion	338
SUMMARY	338

(PREFACE)

- 13章、14章の内容
 - 現在の感情と認知をめぐる論争の先駆けとなる、初期の理論について
 - 認知についての理論に深みを与えることのできる、生理・神経科学の理論について
 - 感情を裏打ちする、社会的認知の理論について
 - 14章では、感情がどのように認知に影響するかを考え、これまで置かれてきた感情と認知が別々であるという前提を検討する
- 以降で紹介する諸理論の中には多くの相互に無関連な説明が未検討なまま含まれてもいるので注意

¹ 一橋大学大学院博士後期課程.

DIFFERENTIATING AMONG AFFECTS, PREFERENCES, EVALUATIONS, MOODS, AND EMOTION
 (感情・嗜好・評価・ムード・情動を区別する)

Affect and company (感情と類似概念の定義)

感情 (affect)	嗜好 (preference):	比較的マイルドな主観的反応 快か不快にわかれている	持続性高
	評価 (evaluation):	人、モノなど特定の対象にむけてむけられたポジティブ・ネガティブな反応。≒態度	
	ムード (mood):	特定の対象をもたないポジティブ・ネガティブ反応	
	情動 (emotion):	ポジティブ・ネガティブよりも複雑な感情の分類に対応したもの。 喚起などを含む生理的反応を伴う強烈な感じ(feeling)。	持続性低

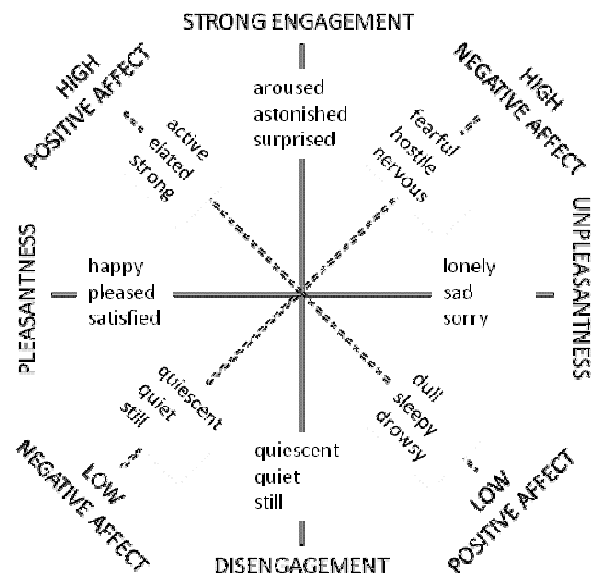
Differentiating positive and negative responses (ポジティブ・ネガティブ反応の区別)

- これまでには主に2極(bipolar)構造と2価(bivalent)構造いずれかの二次元構造が適当とされてきた。

	2極構造	2価構造
構造の特徴	ポジネガの両極評価 × 喚起の高低(e.g., Barrett & Russell, 1999; Russell, 2003, Fig. 13-1 実線)	ポジティブ感情とネガティブ感情は独立(for reviews, see Cacioppo & Gardner, 1999; Diener, 1984, Fig. 13-1 点線)
情動経験	強く、単純で短期的	長期的(例.生活満足度)
あてはまりのいいデータ	接近・撤退(withdrawal; Cacioppo & Gardner, 1999)の行動反応言語報告や感情の分類	長期的な経験の自己報告や心理生理学の知見(Cacioppo & Berntson, 1999)
相対する感情の生起	片方の極(例.満足)を感じている時に、逆の極(例.不満)は感じない (Diener & Iran-Nejad, 1986)	状況によっては、幸福と悲しみが同時生起
ポジ感情ネガ感情の関係	負の相関	相関なし

ポジティブ感情・ネガティブ感情の機能

- ポジティブな情動は比較的限定されているが、優勢 = 人々のベースラインはややポジティブ。これがポリアンナ効果やポジティブバイアスをうむ(Cacioppo & Gardner, 1999; Matlin & Stang, 1978; Sears, 1983)
- ネガティブ情動は稀であるため注意資源を集め、脅威への対処を可能にする。
- ネガティブな情動の方がポジティブよりも複雑性が高い。ポジティブ感情次元構造は存在するが、もっとシンプル (Argyle & Crossland, 1987; Ellsworth & Smith, 1998b)



Basic emotions?(基本的情動とは?)

- 何を持って基本感情とするかは難しい問題(Ortony & Turner, 1990; Russell, 2003)
⇒必要十分条件(=all or nothing)ではなく、プロトタイプの観点(=a matter of degree)で考える(4章参照)
 - 各感情にはパターン化された出来事の評価、表1 Fig.13-1 抜粋 観的感覚、生理的变化が存在
 - 情動がパターンに一致しているほどその情動はプロトタイプ的と言えるが、多少一致していなくてもその情動に分類される
 - このプロトタイプは情動の特定だけでなく、説明や合理化に役立つ(Clore & Ortony, 1991)
- 各情動特有の生理的变化に対するスキーマは、文化をこえて普遍的(Rime, Philippot, & Cisamolo, 1990)。個別の情動プロトタイプと文化の因果関係は曖昧
- 情動の社会構成主義では、文化が情動のほとんどを規定していると考えられる
 - 情動は文化を共有するメンバー同士のあいだで認知的に表現された一次的な社会的役割
 - 心理のレベルで考えると、人々は自分の情動メタ経験から情動を構築し(Russell, 2003)、各特徴を結びつけて情動をラベリングする

Conclusion (略)

EARLY THEORIES

(初期の諸理論)

- William James(1890/1983)+Conrad Lange(1885/1922): 自律神経のフィードバックと筋肉のフィードバックが情動を構築すると主張
⇒James-Lange 説: 各情動に独特な生理的なパターンが私たちの感じ(feeling)を決める
 - 認知や心的活動が情動の生起に果たす役割を軽視。
- Walter Cannon(1927): 内臓の感覚だけですべての情動反応を区別するのは困難だし、情動反応の速さを説明するには自律システムの反応時間は短すぎる
- 他にも多くの研究者が情動への生理的反応の寄与の限定性を主張し、根本的な問題が未解決
 - 喚起が拡散し高低の範囲をもっているとしても、どうやって豊富な情動経験を説明できるのか?

PHYSIOLOGICAL THEORIES OF EMOTION

(情動に関する生理学関連の理論)

Facial feedback theory(顔面フィードバック理論)

- 顔面フィードバック理論: 感情的なイベントが生得的な筋肉配列変化を引き起こし、顔面にあらわれたもののフィードバックによってのみ感情を自覚することができる(Tomkins, 1962; cf. Gellhorn, 1964)と主張
 - 核となる考え: 表情からのフィードバックが情動経験や行動に影響する(Buck, 1980; Winton, 1986)
 - 表情は他の生理的反応(心拍や皮膚電位)と密接に関連し、それらは統合された生理的反応の一部として情動の基本次元(Winton, Putnam, & Krauss, 1984)に対応(cf. Cacioppo, Petty, & Geen, 1989; Ekman, Levenson, & Friesen, 1983; McCaul, Holmes, & Solomon, 1982; Zuckerman et al., 1981)
 - 顔面フィードバック理論があてはまるのは快・不快+喚起に限られる
- 表情が自己報告のムード、情動、評価に影響することはくりかえし示されている
 - 典型的な実験では参加者はポジティブ/ネガティブな表情を作らされる(ラベリングはされない)

◇ ペンが唇につかないようにして歯で挟んだ(smileを作る)後では、コメディ漫画からより多くのユーモアが感じられた(Strack, Martin, & Stepper, 1988)

- ただしこれらの研究には批判も多い
 - まとめてみると効果サイズが小さい(Matsumoto, 1987)
 - 追試に失敗する場合も多い(Buck, 1980; Ellsworth & Tourangeau, 1981; Tourangeau & Ellsworth, 1979; but see Hager & Ekman, 1981; Izard, 1981; Tomkins, 1981)
 - 認知が顔面フィードバックを媒介するかについても意見は分かれる(Laird, 1974; Gellhorn, 1964; Izard, 1972, 1977; Plutchik, 1962; Tomkins, 1962)。デマンドの問題も未解決
- それでも顔面フィードバック理論とそれ以外の非言語手がかりからのフィードバックという説明は複雑に区別された感情のパズルを生理学的な観点から埋めるものといえるだろう

Excitation transfer(興奮の転移)

- 喚起は特定性を持たず、衰えるのに時間がかかり、その分配(の意識的統制)は困難
 - ⇒ 生じた喚起に認知的解釈を加えることが必要になってくる
 - ⇒ 事前のセッティングで生じたそのまま残った喚起が、新しい状況に結びつき、感情反応を強める
 - 多くの実験が上記の主張を支持
 - ◇ 転移の種類は恐怖⇒ときめき(romantic attraction, Dutton & Aron, 1974)、怒り⇒ときめき(e.g., Barclay, 1970; Barclay & Harber, 1965)、ときめき⇒攻撃行動(e.g., Zillmann, 1971)、嫌悪⇒ユーモアの満喫(J.R.Cantor, Bryant, & Zillmann, 1974)など様々
 - 転移するのは喚起だけで、事前のベイレンスは無関係(ただし異論については R. A. Baron, 1977; Branscombe, 1985 参照)
 - 単なる喚起の高まりだけでも怒りやときめきは強化される
 - ◇ 事前に運動をすると反応がより攻撃的または怒りに満ちたものになる(Zillmann, 1978; Zillmann & Bryant, 1974; Zillmann, Katcher, & Milavsky, 1972)。
 - 喚起の転移には認知の媒介はないと考えられている
 - ◇ 喚起を高める刺激への接触が意識されていない場合にも、感情的な反応が生じる(Croteen & Wood, 1972; Niedenthal & Cantor, 1986; Robles et al., 1987; Spielman, Pratto, & Bargh, 1988)
- 興奮転移理論と Schacter & Singer(1962)の理論の違い
 - Schacter & Singer(1962)は、特定の説明を即時に行えない生理的喚起がラベリングされ、解釈され、特定されると情動になると主張。喚起が説明を必要とするのは、それが意識的に知覚されたためと考える。また、事前の情動の源泉が曖昧な場合にあてはまる(Kenrick & Cialdini, 1977)

Affective Neuroscience(感情の神経科学)

- 神経科学の知見は、これまで述べてきたことを裏打ちするとともに、知見の広がりにつながる
- 初期の神経科学研究では、EEG を使ってポジティブ/ネガティブな感情反応のタイミングとおよその位置の特定が行われ、左右の Midfrontal の活性化が接近/回避の行動傾向を決定(Coan & Allen, 2004; Davidson, 1993; Davidson, & Irwin, 1999)
 - 情動の非対称性というシンプルな考え方は、感情プロセスの複雑性を鑑みると誤解を招くものだが、説得的なものだった。ただし、その後のデータの追加により修正されていった。

- 最近の研究では神経イメージ図法が用いられ、部位の特定化が進展
 - 強い情動を伴う態度で特にネガティブなもの⇒扁桃体、島(insula) が関連
 - 強い情動を伴う経験(特に恐れ)⇒扁桃体、眼窩前頭皮質を含むシステムの一部(Adolphs, 2002; Phelps, 2006; Murphy, Nimmo-Smith, & Lawrence, 2003; Phan, Wager, Taylor, & Liberzon, 2002)
 - 嫌悪⇒島が関連。メタ分析の結果(Phan, Wager, Taylor, & Liberzon, 2002)、
 - それ以外の情動と脳の部位についての知見は安定していない。用いている手法の問題か、注目するもの(自己報告された情動または特定の情動を引き出すとされる刺激)の問題だろう

Conclusion(略)

SOCIAL COGNITIVE FOUNDATIONS OF AFFECT

(感情の社会認知的基盤)

Table. 13-1

Theories & theorists	Cognitive structure	Affective impact
<i>interruption</i>		
Schacter Mandler	説明されない喚起+認知的な解釈 (知覚的) スキーマ or 目標志向行為の妨害	ラベリングされた情動 促進、適合⇒ポジティブ 妨害、不適合⇒ネガティブ
Berschied	依存的な目標追求の妨害	同上
<i>Matching</i>		
Keltner	期待と権力関係	自己に高権力⇒ポジティブ 自己に低権力⇒ネガティブ
Fiske Linville Tesser	スキーマ・カテゴリーの適合 表象の複雑性 思考を通じたスキーマの精緻化	連合する感情 感情の調整 感情の極端さ
<i>Outcomes</i>		
Weiner Kahneman & Miller	結果帰属(責任の所在、安定性) 規範と現状の比較	異なる情動 通常と異なれば情動拡大
<i>Managing</i>		
Simon Oatley & Johnson-Laird Carver & Scheier	環境に応じた目標の優先順位決定 成功可能性に応じた目標の優先順位決定 現状と基準のずれ	警戒システムとしての情動 同上 情動を手掛かりとする努力 or 撤退

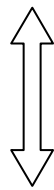
Emotion as cognition plus arousal: interruption theories(認知+喚起=情動:妨害理論)

- 誰かに魅力を感じるのには、相手の性格が自分の性格にあっているからと考えがち
 - 近接性、タイミング、利便性、事前の喚起の影響には注意を払えないことが多い
 - Schachter の理論によれば、人々は先行する経験や社会化の過程、文脈を用いて喚起を解釈する(Schachter & Singer, 1962)⇒情動の二要素理論
- Schachter の二要素理論では情動が認知活動によって媒介されることを主張している
 - 最近の理論では、喚起+認知という構図をより進歩させている

Mind and arousal in emotion(情動における意識と喚起)

- Mandler(1975, 1990)は、情動の起源は喚起にあるとし、喚起のずれと妨害に注目
 - 喚起は知覚的 or 認知的なずれや、進行中の行為の妨害によって生じる
 - 活動が複雑であるほど妨害された時の喚起は高く、喚起は情動を強化する

- どのような期待が妨害されたかによって、妨害の解釈(ポジティブ/ネガティブ)が決まる
 - 複雑な行動の連鎖が妨害された場合は、その妨害が目標への到達を邪魔するか早めるかという解釈が媒介し、それにより情動のポジネガが決まる。またその際、出来事の心的表象も形成
 - 知覚—認知スキーマが妨害された場合は、妨害の程度(⇒喚起)は解釈を必要とせず、直接反応のポジティビティを決定(Gaver & Mandler, 1987)
 - 知覚スキーマ(例.音楽、視覚芸術、食べ物)の非確認は以下のとおり



熟知性高⇒快だが弱い
 熟知性+僅かな新奇性⇒なじみのあるものの快い認知
 少し強さが加わるので良い
 新奇性高⇒なじみのある言葉で再解釈できるのであればよい
 完全な不調和(新奇性高)⇒強いネガティブ感情

Expectations, goals, and emotions in close relationships (親密な対人関係における期待、目標、情動)

- Berscheid は Mandler の理論を親密な対人関係に援用(Berscheid, 1982, 1983)
 - 対人関係が親密になるほど、お互いの目標は相手に依存するようになる
⇒相手の目標を自分が妨害することが可能になる
 - 複雑な目標ほど妨害されると強い情動を引き起こす
⇒依存度が高いほど、それが妨害された場合(例.別れ)に強い情動が生じる可能性が高まる
 - 一方、行動の流れがかみあっている(=関係が良好であり続ける)場合には、妨害がなく情動の生起は少なくなる
- Berscheid は、もっとも親密で関わり合いが深く互いに依存する関係では、真逆の関係と同じくらいの強さしか情動を感じ得ないというパラドクスを指摘
 - 親密な対人間で経験される情動は関係の長さとの負の相関を示し、長期的な関係ではベイレンスにかかわらず情動が生起しなくなる(Berscheid, Snyder, & Omoto, 1989)
 - しかし、これは長期的な関係が問題なくいつているときのみで、それが妨害されたときになってはじめて、非常に強い情動が生起するようになる

Cognitive structures and affect: Matching theory (感情の認知的構造: マッチング理論)

- 本節で紹介する理論は、社会的スキーマ(概念に関する知識)、獲得した結果の解釈、起きたかもしれない結果などの認知的構造(と現実)の一致が情動を生起させると主張

Expectations, motives, and emotions in power relations (権力関係における期待、動機、情動)

- Keltner, Gruenfeld, & Anderson(2003)は、情動と社会関係=勢力の非対称性に注目

	高権力者	低権力者
資源のコントロール	自分	他者
期待	報酬・行動の自由	ポジティブな結果少 ネガティブ結果を恐れる
情動・行動の質	接近	回避、妨害
感情	ポジティブ	ネガティブ
脳の活動	左前頭葉	右前頭葉
分泌される物質	ドーパミン 報酬関連	ノルエピネフリン、コルチゾール、ストレス関連

情動	願望、熱狂、誇り	恐怖、恥、罪悪感、当惑、畏れ、感謝
極端な場合	偏執	不安と抑うつ
注意の焦点	フレキシブル	慎重、緊張
情報処理	自動的	焦点が狭まっている
行動傾向	外向的、防衛性低、衝動を受け入れやすい	統制、抑制されている

※ただし、実際はこの両極のあいだでもっとマイルド

- 上記の知見はいくつかの実証的研究の結果により支持されている
 - 寮の中で高権力の者はムードのベースラインが高い(see Keltner et al., 2003)
 - 自己報告式の社会的権力、支配性、アサーティブネス、リーダーシップの高さはムードと正の相関(Watson & Clark, 1997)

Schema-triggered affect(スキーマ引き金感情)

- 情動は感情関連のスキーマ(affect-laden schema)がうまくあてはまる場合に生じると主張
 - 特定の人物(例.職業、ステレオタイプ)や状況(例.人前での演説)が情動を生起させる
 - 感情関連のスキーマは元々スキーマ引き金感情(Fiske, 1981, 1982)と呼ばれる
⇒カテゴリーベース/属性ベースの反応の区別という考え方へ(e.g., Fiske & Neuberg, 1990)
- ここで重要なことは、事前の経験が即時に感情を方向付けるということ
 - 古いパターンが新しい人や状況にあてはまるという考え方は、精神分析(Singer, 1988; Weste, 1988)や親密な関係間における(Andersen & Chen, 2002)感情の転移の知見とも合致する。表情でも同じことが言えるし(Andersen, Reznik, & Manzella, 1996)、転移は閾下でも生じる(Mayer & Bower, 1986)

Schema complexity and affective extremity(スキーマの複雑性と感情の極端さ)

- Linville(1982a, 1982b; Linville, Fischer, & Salovey, 1989; Linville & Jones, 1980; Linville, Salovey, & Fischer, 1986)はスキーマそのものや、スキーマが感情反応に及ぼすインプリケーションを検討
 - スキーマの複雑性が高いほど、典型的に引き出される感情はより穏健なものとなる
- 一方、思考は感情を極化するという考え方もある
 - 考えるためのスキーマを持っている場合には、特定の刺激の属性についてよく考えると、より緊密な組織化を知覚するため(Tesser, 1978)
- Linville 説と Tesser 説は矛盾するようにも思えるが、それぞれの説は以下のように矛盾しない
 - Tesser の理論では、思考はスキーマの組織化を促し、一貫性を高め、評価を一定に保つように働く。これにより、スキーマはむしろ単純化 ⇒Linville 説と矛盾しない
 - Linville 説; ある時点における評価 ⇔ Tesser 説; 時間経過とともに生じる変化(Linville, 1982b)
 - 思考の極化が生じるのは、既存の特定の評価にコミットメントを行う場合に生じるもの
⇔ 複雑性—極性効果はそのようなコミットメントがない場合に生じる(Millar & Tesser, 1986b)

Obtained outcomes and affect(得られた結果と感情)*Attributions for attained outcomes. (到達した結果の帰属)*

- Weiner(1985, 1986, Ch.6)の達成動機理論で用いられている次元は、将来得られる結果の期待とともに特定の基本感情を生起させる
 - ポジティブな結果+自分自身への帰属+統制可能性高⇒誇り
 - 責任の所在と統制可能性要因⇒情動の質を決定、安定性要因⇒情動の質を誇張する傾向
- 人々はこれらの情動の帰属の法則を暗黙のうちに理解し、他者の情動をコントロールしている
 - 言い訳;自分の行動を外的に帰属し、統制可能性が低かったことを主張(Folkes, 1982; Weiner, Amirkhan, Folkes, & Verette, 1987)
 - 帰属と情動の関係については5歳ですでに理解(Graham & Weiner, 1986; Weiner & Handel, 1985)
- 帰属と情動の関係はスティグマ状況の理解にも利用できる
 - 身体的なスティグマは、安定性が高く統制可能性が低いと知覚
⇔ 心的・行動的スティグマは、不安定でコントロールが可能と知覚⇒周りの怒り、ネグレクト(Weiner, Perry, & Magunusson, 1988; cf. Brickman et al., 1982)
 - スティグマの帰属が自他で異なることにより期待と違う感情を相手からぶつけられることも

Alternative outcomes and affect(ありえた結果と感情)

- シミュレーションヒューリスティック(e.g., Kahneman & Tversky, 1982)に基づき、実際の結果とは異なる結果を想像しやすい場合には、情動反応が強まることを主張
- 規範理論(Kahneman & Miller, 1986)は上記の理論を拡張し、どのような場合に驚きが生じて情動が生起するかを検討
 - 暗黙的な規範に一致しない出来事は思い出しづらいし、将来も起きないと思われやすい
- 情動はその原因が通常では考えられない(abnormal)場合に強度を増す(情動拡大説)

Emotion as managers of goals(目標管理者としての情動)

- 感情は複数の目標に優先順位をつけるという役割をもっている
 - 重要性の高い目標に目を向けさせる(simon, 1967, 1982)
 - 別の目標追求が緊急に必要なとき(例.突然襲われた時)に目標をスイッチする役割
 - 自分の計画の成功可能性の変化に応じて計画を切り替える役割
 - ◇ 主要な計画の妨害⇒怒り生起⇒妨害物の除去
- 類似の考え方として、自己注目のサイバネティック理論が挙げられる(Carver & Scheier, 1982)
 - 自分の現在と特定の比較基準とのずれを埋めようとする行動に情動がわりこみ、それがうまくいっているかどうか、やめるべきかどうか再評価させる

Conclusion (略)**Appraisal theories(評価理論)***Personal meaning(自分にとっての意味付け)*

- Lazarus(e.g., Lazarus, 1966; Lazarus, Averill, & Opton, 1970; Lazarus & Smith, 1988)は、評価(appraisal)を特定の刺激の個人にとっての重要性の評価(evaluation)からなるとし、評価が環境のリアリティについての信念と目標とを結びつけるとした。

- appraisal は以下の二段階を踏む
 - 一次的評価:問題が自分に関係があるかを評価⇒接近 or 回避という単純な反応
 - 二次的評価:問題にどう対処するかを評価⇒自分と環境の関係の調整、特定の情動生起

Cognitive appraisals (認知的評価)

- Ellsworth と Smith(Ellsworth & Smith, 1988a, 1988b, Smith & Ellsworth, 1985, 1987)は人々がもつ状況についての知識＝認知的評価と情動の関連を検討
 - 人々は状況をさまざまな次元(例.agency, 不確実性、注意の焦点)から評価し、それらの評価次元が特定の情動反応を生起させる
- 上記の主張は、特定の情動経験を想起し、それを評価するという研究により裏打ちされている(Fig13-2)
 - Self-agency は恥や罪悪感に関連し、other-agency は怒りや嫌悪を生起させる
 - ネガティブ感情のほうが評価次元の複雑性が高く、各感情の違いが明らか
- さまざまな研究により、さまざまな評価次元が乱立しているが、各研究の共通点は、人が環境に遭遇し、それを解釈すること
 - 中心となる次元は以下のように分けられる

快/不快、 動機の一貫性 バイレンス	Agency 責任の所在	確実性 可能性 統制可能性	注意 関心 新奇性
--------------------------	-----------------	---------------------	-----------------

Affective forecasting(感情予測)

- 人々は未来の自分の感情について期待をもち、それが現実と適合するかを予想する
- いくつもの研究で、人々は自分の将来の感情状態について、誤って極端なものを予測することがわかっている(Dunn, Wilson, & Gilbert, 2003; Gilbert, Pinel, Wilson, Blumberg & Wheatley, 1998; Wilson, Wheatly, Meyers, Gilbert, & Axsom, 2000)
- その原因としては、心理的免疫システムの無視や出来事への過度の注目、非典型的な出来事の想起失敗や過去の感情が自分に与えた影響の過大視などがあげられる

Conclusion(略)

SUMMARY(略)